

# YASSE TABUCHI



「空洞の森」1980 高松市美術館蔵

## 田淵安一展

—輝くイマージュ—

1990年1月13日[土]→2月14日[水]

開館時間=午前10時→午後6時30分(但し入館は6時まで) 木曜日休館

(会期中一部展示替があります。)

前期=1990年1月13日[土]→1月31日[水] 後期=2月2日[金]→2月14日[水]

主催・会場=(財)品川文化振興事業団 ○美術館

入館料=一般500(400)円/高・大生300(200)円/小・中生100(50)円 ( )内は20名以上の団体料金および割引入館料

【対談】

田淵安一・粟津則雄(文芸評論家・法政大学教授)

1月20日[土] 2:00P.M.→4:00P.M.

会場=大崎ニューシティ内別会場

(財)品川文化振興事業団

○美術館

オー美術館 品川手塚大崎駅東口下車徒歩1分

東京都品川区大崎1-6-2大崎ニューシティ2号館TEL.495-4040





「影すぎる」1961 東京都美術館蔵(前期展示)

極めて強い文化意識に支えられた、比類ない絵画イメージの探求者として著名な、田淵安一の東京での初の大規模な展覧を行います。

1921(大正10)年に現・北九州市小倉で生まれた氏は、独立美術協会研究所で須田国太郎に学び、敗戦後には東京大学美術史学科に復学するかたわら、猪熊弦一郎の指導を受け、新制作展に出品、金山康喜ら画家達とも交わりました。1951(昭和26)年、金山らとフランスに渡航、戦後最も早い時期の留学生の一人となりました。以後、現在にいたるまでフランスを本拠として、国際的に活躍していることは周知のことです。

その作品は、当初はキュビズム的な具象絵画でしたが、次第にカレル・アペルらの北欧の旧コブラ系の画家たちとの交流もあり、いわゆる「熱い抽象」の傾向に移行しました。

1959年には、水墨画を思わせる単色によるアンフォルメル的な激しい「流動的空間」を見せましたが、日本への一時帰国、タイ・インド等への旅行を経て、その後一転して原色となり、有機的な様々の土俗的な象が空間に乱舞しだします。「窓」「鏡」と題されたそれらの連作は複合的で多義的な民族的象徴が充溢するのみならず、異次元の空間が並列され、または、画面は入れ子状となり、全体として統一しつつも錯綜し重層化しています。その後、「饗宴」「花と火山」を経て、「門」等へとつづくシリーズ群では、さらに形態は遅く放縦になりますが画面はより構成的で明確なものとなってゆきます。そして1977(昭和52)年から始まる「大樹」の連作においては、絵画構造自体が新たな転回を見せ、スペクトルに似た色帯を横に置きつつ、画面全体に統一的なイメージが支配し、放埒な筆致による宇宙樹の風景が絵画という存在の不可思議さと真実を告げています。また、「チャニーズ・ドリーム」では、金箔の地が新たに登場し、底抜けの金地の鏡面と、画面上で反復される東洋的なかたちとの響応関係が見られ、さらに、最新作の「モノダの漂流」は、白地に突然に現出した原色の塊が漂う強いイメージの画面を見せ、今一度の大きな変化を感じさせます。

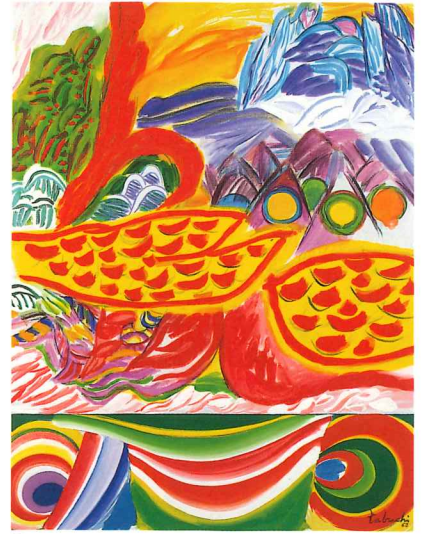
本展は、特に作者のみならず、日本絵画史上の一つの到達点と言える、「大樹」シリーズ以後、最新作までの油彩作品を中心として、初期からの代表作60数点を水彩等10数点と併せ展示することで、田淵のイメージの軌跡を辿ろうとするものです。



風吼え岬 1989(後期展示)

# 田淵安一展

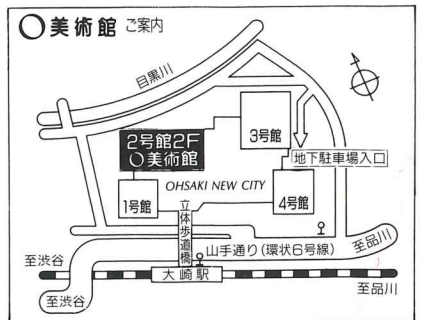
YASSE TABUCHI



「桃源郷の風景」1968



「虹の瀧」1981 北九州市立美術館蔵



●交通  
山手線大崎駅(東口)下車徒歩1分  
東急バス(大井町駅→渋谷駅)大崎駅下車徒歩1分

●駐車場  
美術館専用駐車場はございません。  
お車でご来館の場合、「大崎ニューシティ」地下2Fの  
駐車場(有料)をご利用下さい。

(財)品川文化振興事業団

## ○美術館

オ一美術館 JR山手線大崎駅東口下車徒歩1分  
東京都品川区大崎1-6-2大崎ニューシティ2号館 TEL.495-4040